

翻刻

プランゲ文庫所蔵『コスモス』第七号検閲文書【Ⅱ】

—伊藤和「B 29の高音」(検閲ゲラ版)—

附、参考資料

村田裕和

—資料概要—

ここに翻刻するのは、米国メリーランド大学プランゲ文庫が所蔵する雑誌『コスモス』通巻第七号(第二卷第三号、昭和二十二年十月三十一日発行)に付帯する検閲文書の一部(ゲラ第11~13頁の全部)である。これらは、第七号の検閲文書全十七点(内ゲラ六点)の中のゲラ三点にあたる。ここには伊藤和の詩「B 29の高音」が印刷されている。残りのゲラ三点については、拙稿「詩誌『コスモス』検閲の研究—伊藤和「B 29の高音」削除から不掲載へ—(上)」(本誌前号)で触れた。なお、「翻刻 プランゲ文庫所蔵『コスモス』第七号検閲文書【Ⅰ】」(同上)で付した検閲文書番号の「CD004_G002」~「CD006_G004」に相当する。第七号は、三つの記事に合計六箇所削除指示を受け、一つの記事で有効情報が採取された。これは『コスモス』各号のなかで最も多い。なかでも「B 29の高音」は三度の検閲を経て四箇所削除指示が確定した。文学作品(詩)に対する検閲処分の実態を知る上で重要な事例の一つである。

三度の検閲を執行した検閲官は、順に「フクシマ」↓「フルヤ」↓「ヤマト」。ゲラには違反の疑いのある箇所などに鉛筆で丸囲みや傍線が引かれ、引き出して×などとある。また、第11頁から13頁の上部に、ブルークレヨンで「hold」と書かれている。ゲラ表紙の日付などから判断すると、ここまでの作業が十一月五日までに行われ、その後、上級者の判断をおおぎ、削除箇所が決定されたものと思われる。このゲラには、決定

された四箇所に対するブルークレヨンの囲みと、「delete」の指示が見られる。この作業は十一月十日までになされた。鉛筆書きで囲まれた部分は、ほとんどが最終的に削除指定を受けているが、第七スタンザ全体の鉛筆囲みは削除を免れている。なおゲラには鉛筆でスタンザごとに①から⑨まで番号が振られている。

以下の翻刻では、ブルークレヨンの囲みによる削除指定箇所を傍線で示す。ルビや、助詞に「お」「わ」を用いる仮名遣いなど原文(ゲラ)のまま。ただし漢字は新字体(常用漢字)に改めた。①~⑨は鉛筆で記されたスタンザ番号。《》内は翻刻者(村田)による注記。ゲラのページの開始位置(11~13)と、二段組みされたゲラの下段開始位置(△)も翻刻者による。なお参考資料として、『コスモス』通巻第七号(第二卷第三号)目次「および、「プランゲ文庫所蔵『コスモス』第七号検閲文書(翻刻)」を付す。後者は、本誌前号に掲載した「翻刻【Ⅰ】」のうち、検閲官による報告書および裁決書(検閲文書番号「CD009_D003_F1」~「CD016_D010」の試訳である。全号の目録は別途公開を予定している。

「B 29の高音」の公開にあたっては、著作権継承者の許諾を得ることができた。この場を借りて心よりお礼申し上げたい。また、前回に引き続き、メリーランド大学プランゲ文庫より写真版掲載を許可いただいた。室長坂口英子氏をはじめ関係各位に感謝申し上げます。

B 29の大音

伊藤和

① お、。

ひさしぶりに、

B 29よ。

例の大音お、やすらかにひゞかせて。

それから、

一分間もた、ぬまに、

もう、北に去り。

また二分間もして、

次のが迫る。

② お、。

このように飛ぶ。

B 29わ、

▽ つまりいま、

演習である。

墜落する一機もなかつた。

《削除A》

③ B 29よ。

そして次から次と、

大音の通るたび、

顎をあげて仰ぐのわ、

12

老いばれや。女や。子供ばかりでなく。

おやじ。若い衆も。

しばらくの間わ、

顎がのびてしまうほど、

仰いで咏嘆した。

まつたく、いまわ。

いまわ、逃げることもなし。

怖しいと考える必要がなくなつた。

④ だがしかし。

大音よ。

あれがB 29と、

震動音に耳を打たれて、

二分間も仰ぎつづけると、

田舎者の頭わ、

変つてくる。

神と云う奴が、僕に命じたように、

直ぐに、

咏嘆のお喋べりが立つ。

《削除B》

⑤ 「ドカンと始まる気配ちや」

《削除C》

——どこかの国が、

いまに火ぶたを切る。

▽ イヤ僕根性の咏嘆が、

まつたく。

大げさに。

そんな愚劣お、

頭のなかに描いて喋べる。

⑥ B 29よ。

まだしかし、

田舎わひろい。

八方に、

ぴかりと星わ光っている。

鳴いているのわ溝の蛙ら、

もつともつと、遠くにも蛙ら。

笛の音。

太鼓の音。

これわ、

若い衆のいろ香もおほれて、

芸能会の稽古。

⑦ B 29よ。

またこの外に、

北から南から還つてきた、

復員のなかからの、

もつぱらオブローモフがごろごろし。

すこし学問を出た奴わ、

いまこそヒューマニズムだと喋るのもあり。

ヤニ下つて、

愛情の半端や。

あれやこれや。

空虚や。

⑧ お、。

B 29わ、

ゆつくりと、

やすらかに、

卯の花時の空を飛ぶ。

⑨ B 29よ。

まつたく、

ひさしぶりに、

例の大音よ。

田舎者のびつくりする飛行機よ。

——墜落のことや、

——火をふくことや、

いずれの国も。

もう、

損なことわ間尺にあわぬ。

さて演習わ、

そちらさまの御都合だろう。

(以上、翻刻おわり)

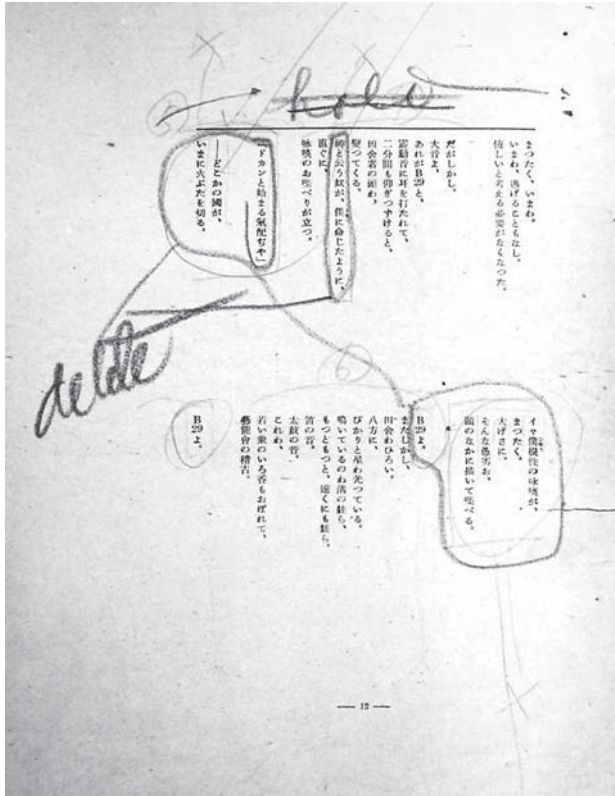


写真 2: 『コスモス』 第 7 号ゲラ p.12

Gordon W. Prange Collection, University of Maryland Libraries

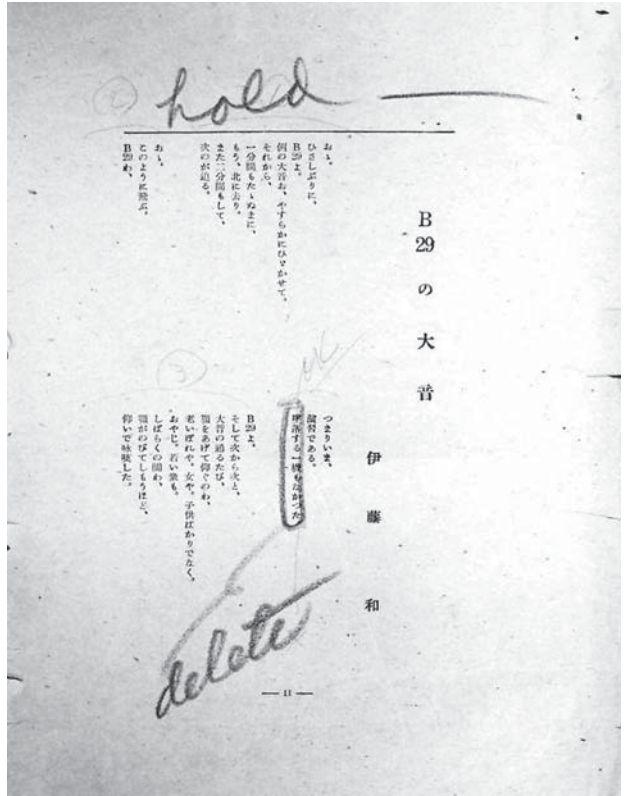


写真 1: 『コスモス』 第 7 号ゲラ p.11

Gordon W. Prange Collection, University of Maryland Libraries

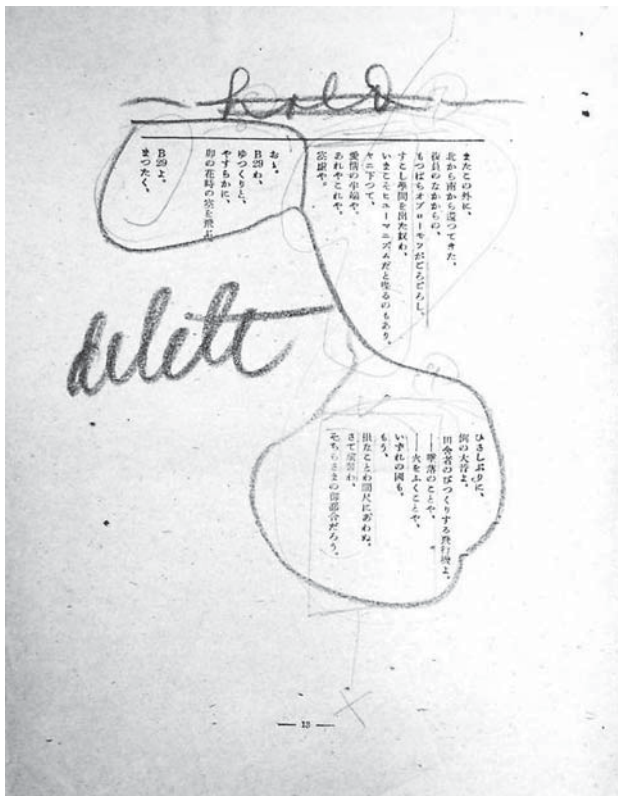


写真 3: 『コスモス』 第 7 号ゲラ p.13

Gordon W. Prange Collection, University of Maryland Libraries

【参考資料 1】『コスモス』通巻第七号(第二巻第三号) 目次

目次		
巻頭言 批評をもとめる	無署名	3
鬼 (*詩)	金子 光晴	4
コスモス雑記		7
田木 繁・小野十三郎・岡本 潤・伊藤 和・木原 實		11
秋山 清・廣澤 一雄		
流れの中から(二) — プロレタリア詩に		
ついで覚え書 —	壺井 繁治	12
		19

廣瀬中佐（*詩）	秋山清	14	16
文字と言葉	高山	19	
中野重治の歌	木原實	20	21
（*広告1）		21	
欺瞞者の文学	平林敏彦	22	30
離別（*詩）	廣澤一雄	24	25
長城（*詩）	サカイ・トクゾウ	26	27
中原中也詩集	杉本駿彦	30	31
時評 高村光太郎の暗愚について	秋山清	32	34
随筆 郁達夫その他	金子光晴	35	37
技術（*詩）	祝算之介	37	
投稿について	編集部	37	
詩論	小野十三郎	38	47
土運びの歌（*詩）	田木繁	40	41
齒車（*詩）	長谷川七郎	42	43
白日（*詩）	植村諦	44	45
（*広告2）		47	
倉橋頭吉の死	岡本潤	48	49
紙幣の詩（*詩）	吉田嘉七	48	
おちさんの振る旗（*詩）	島田屯	49	
あいつ（*詩）	伊福部舜兒	50	
奥付		51	

*表紙 上部に横書きで「コスモス」。中央に縦書きで十七名の執筆者名列挙。

下部右隅に横書き二行で「No.7 / 第二卷第三号」。印刷発行日記載なし。

*ページ数は表紙から起算されている。奥付頁（第51頁）は裏表紙裏（表3）に

あたる。

*広告1 『植村諦詩集愛とにくしみの中で』（組合書店）

*広告2 小野十三郎著『詩論』（真善美社）

*奥付 「特価十八円（送料一円二〇銭）／昭和二十二年十月二十五日印刷／昭和二十二年十月三十一日発行／編輯兼発行人 東京都中野区上高田二ノ三四八 秋山清／印刷人 東京都新宿区市ケ谷谷町二一 稲月實／印刷所 東京都新宿区市ケ谷谷町二一 株式会社現実社／発行所 東京都中野区上高田二ノ三四八 コスモス書店／配給元 東京都千代田区神田淡路町二ノ九 日本出版配給株式会社」

（以上、参考資料1おわり）

【参考資料2】プランゲ文庫所蔵『コスモス』第七号検閲文書（翻訳）

（凡例） 文書の名称は、内容のまとまりごとに新たに付し□で囲んで表示した。冒頭字下げを施し、適宜追いきむなど、全体の体裁を統一した。検閲官の追記（書き込み）は太字で示した。青クレヨンによる（ ）、「 」、や書き込みはゴシック体で表示した。同じく青クレヨンの傍線は太線で示した。誤字脱字の訂正や語句の挿入などはすべて本文に反映させた上で訳したため、実際の文書の様子は本誌前号掲載の「翻刻【I】」を参照されたい。なお訳語は適宜原詩を参照しつつ、検閲官による英訳の特徴を示すようにあらたに訳し直した。

検閲官 T・フクシマ

『コスモス』 47年10月第2巻第3号

違反の疑い

11頁 13頁 「B29の大音」 カズ ヤスシ イトウ

検閲官ノート

上記の詩の前半では演習のために轟音をたてて頭上を飛ぶB29に対する日本人の感嘆が描かれているが、一方、詩の後半では、空飛ぶ怪物たちの轟音に影響される単純な見物人たちが、どれほど深く感動したかを描いている。

ドカンと始まる兆しがある

どこかの国が火蓋を切る

そう遠くない日に

ああ、本当に！ 奴隷精神の感傷

まったくそれらの言葉はおおげさで

そんな愚かな幻影が

彼らの頭の中に。

添付の全訳およびコメントを見よ Y・Y

いつものことながら、現代詩と呼ばれるようなこうした文学作品の場合、上述のように、詩のテーマと論理が短く凝縮されたり、混然一体となったりしていて、この詩が何を言おうとしているかを、検閲官が正しく判断することは容易ではないように思われる。概して言えば、違反には当たっていないと検閲官は信じているが、しかし、最終スタンザの一部には、

すべての国は心から感謝している

今や、
あの損な戦争は何も支払ってくれない
ことを。
(しかし、演習はただ
占領軍様のご都合次第で
許されるものらしい)
とある。詩人が()の中の部分で意味していることははっきりしないものの、占領軍あるいは合衆国の政策に対するいくらかの皮肉を含意しているように見える。(しかしながら、ここで使用されている「占領軍」や「合衆国」といった直接的な言葉は、日本語の原文にはなく、にもかかわらず、検閲官は「ソチラサマノゴツゴウダロウ!」の部分から、右に意識したように受け取らざるをえない。もし、この詩作品のどこかに削除されるべき箇所があるとすれば、それは()内の最終部に考慮の余地があると検閲官は考える。

検閲報告書2 サカイ・トクゾウ「長城」(T・フクシマ)

違反の疑い

29頁 「長城」 トクゾウ サカイ

長城の下で吠えている

山々は

内戦のゲリラ隊の快適な巢

人民解放軍に難攻不落の

砦を与える

「長城は怒りに身をふるわせて

吠え続けるだろう

(あらゆる専制君主が打ち倒されるその日まで)

「政権が交代するまで」

削除 Y・Y

中国批判

検閲官ノート

上記の詩の前半は、かつての日本の軍国主義が中国に侵攻したことに對しての哀歌と理解される。一方、後半は中国赤軍への賛歌である。この点に限っていえば、いかなる違反も発見されないであろう、と検閲官は信じる。しかし詩の最後の2行、すなわち上述の(一)で括った部分は、もし専制政治への一般的な批評として受け取るなら、もちろん異論はないけれども、もし蒋政権もしくは国民党政府への暗示的言及としてうけとるなら、キーログ違反の部類に入るかもしれない。上述のスタンザにおいて、詩人が何を意図しているかは、はっきりとは示されていない。しかしながら、左翼主義者はふだんから蒋介石総統の独裁主義や専制政治を非難しており、このことから判断すれば、その部分が蒋政権の崩壊の希望を含蓄したものと解釈することは理にかなっているはずである。もしこの推測が間違いでなければ、削除が妥当であろう。検閲官は、過大な評価と神経質さを非難されることをただ恐れる。

検閲報告書3 平林敏彦「欺瞞者の文学」(T・フクシマ)

違反の疑い

25頁

「……その腐敗の極みに到達した現詩壇のメンバーは、非共産主義世界の内側での自己保全を確実にしようとして、意識的にデモクラ

シーとコミュニズムとの対立を構えてみせるという手段によって、このように、(明日のプロレタリア革命につながる)今日の民主的革命の発展を暗黙のうちに阻害する側に立つ姿勢を示し始めている。」

不安扇動

検閲官ノート

上記の(一)内の箇所を推奨する。この教理における彼らの信念がいかに確固としたものであったとしても、少々教条的で、それゆえにプロパガンダのように聞こえる。なぜなら、今日の民主的革命が将来のプロレタリア革命につながっているか否かという問題自体は、歴史的討議を必要とするからである。

検閲報告書4 金子光晴「郁達夫その他」(T・フクシマ)

情報の疑い

37～38頁

……反軍国主義の現時の傾向は、権威を与えられた世論といわぬばかりに誇らしげに見える。しかし、われわれのような樂觀的な国では、数年のうちに誰もそんな意見を支持し続けていないだろうことは、たやすく予測される。……

……事実、私が強く言いたいことは、現在でさえ、私は、周囲の街の空気からいくぶんかの抵抗を感じているということである。

われわれの現在の封建制それ自身が、魅了する力を増してきている。

それはすなわち、一方において、私たちのリベリズムがいかに

安価なものであるか、また他方において、独立性を欠いている日本の民衆の精神的基礎がいかに貧しいものであるか、ひいては、彼らがいかに強く封建制に縛られているかということを語っている。

OK *

検閲官ノート

このような詩的エッセイを有効情報として提出することは、ばかげているようであるけれども、上に抜粋した部分は、著者である詩人の金子光晴の鋭敏な直感が捉えたもので、日本におけるある種の大衆的傾向に言及しているものとして、注目に値する事実であると検閲官は考えるゆえに、ここに取り出したものである。とはいえ、上記の資料は情報項目としては具体性に乏しいとしても、SCAPはその事実について熟知していることがのぞましいと検閲官は考える。

再検閲報告書Ⅰ 伊藤和「B29の大音」(Ⅱ) (S・フルヤ)

『コスモス』第二巻第三号

「B29の大音」カズ イトウ作

再検閲官 S・フルヤ

(1) この9聯からなる詩は風刺と見なされるべきである。

(2) この風刺は両刃の刀である。一方では、B29の強大な力を賞賛するかのように見せかけながら、いわゆる非武装日本の空が、もつとも軍事的なB29の轟音で響き渡っていることを、悪意ある皮肉で刺すことを目的としている。これは地球上に平和が訪れないことを抗議しているようである。

(3) 他方、日本の人々は風刺の目標にされている。彼らは打ち負かされた、しかし、彼らは、時には安っぽい懷疑に落ち込み、時には次の世界大戦が来ると信じながら、B29の威厳と優雅さのこと、平和と文化のことなどを、寄り集まった馬鹿者みたいにぺちやくちゃおしゃべりしている。彼らは、何にでも驚き見とれ、うわさ話にすっかり夢中になりがちで無教養な農民に似た、みじめな国民である。

(4) 削除によって、我々はこの詩からトゲを除き、平和的な要素、つまり賞賛に値するB29と日本の人々を若干元気づける部分だけを残すことが可能である。

(A) 削除対象としては以下の箇所を提案する。

第2スタンザ 6行目

(撃ち落とされる一機さえ見えなかった)

注 これは風刺的であり、多くのB29が大戦中に撃ち落とされたとことをほめかしている。

(B) 第4スタンザ 9行目

(あなたも、多くの奴隷(召使い)が、神と呼ばれるやつに命令されているように)

注 日本人々の間でキリスト教がさらに影響力を増してきていること、あるいはむしろ、アメリカ的な考え方がさらに優位になってきていることを風刺的に示唆している。

検閲注 削除箇所は、合衆国批判をとりのぞく必要性を示したものの第5スタンザ全体

(「またドカンと爆発しそうな様子である」

——いくつかの国を見ろ
たしかにドカンとやりそうだ

まさに奴隷にふさわしい賞賛で
たしかに

荒っぽい誇張で

そんな愚かな当て推量

彼らは夢中になっておしゃべりする)

注 あらたな戦争が近づいていることをはっきりと示唆。うわ

さは馬鹿げたこととして烙印を押されているにもかかわらず、
皮肉なあざけりの声を、これらの行間に聞くことがで
きる。

(D) 第9スタンザ 6～12行目 最終スタンザの全部

「——なんと撃ち落とされた、

——なんと火を噴いて落ちた、

知らない国はない

今は

報いられないものに払いはしない。

なぜあの演習、それで？

あれは彼ら自身の御用事でしょう、けっ！

注 皮肉なおしゃべりのクライマックスだが、前項の削除とあ

わせて最後の7行の削除で、詩の終わりが可能な限り健全
に聞こえるようにするには十分である、しかしおそらく、
このように静かで牧歌的な場所に自分が身をおいているな
どとはけっして予期していないであろう詩人の非常な悔し
さをともなうだろう。

2頁目の下段にある二箇所「B 29よ」も削除。これで詩は安全に
なるだろう。

再検閲報告書2 伊藤和「B 29の大音」(Ⅲ) (ヤマモト)

雑誌『コスモス』十月号

第11～13頁

ヤマモト

記事タイトル「B 29の大音」カズ・イトウ

① おお！

久しぶりに

B 29がやってきて

いつものすごい轟音をまんべんなく響かせて、絶え間なく——

それから、

一分もすぎたあと

彼らは北へ見えなくなり

さらに二分して、

次の飛行機がくる。

② おお！

こうして彼らはふたたび飛ぶ——

B 29よ。

しかし、つまり、今

まさに空の演習である

「(そして落とされる一機もない)」

《削除A》削除の上通過

③ おお！ B 29！

そして次々と

彼らは轟音で通過すると

人々はあごを上げてふりあおぎ——

よぼよぼの老人、女、子供だけでなく、
男や若者さえ
しばらくの間

あごが落ちてしまうくらいまであごを上げて
そしてふりあおいでその光景に叫ぶ。

まったく、今は――

今は、逃げる必要はなく、
怖いと感じる必要もない。

④ かし――

すばらしい轟音よ！

あれがB 29だ！

その振動を聞きながら

そして二分もそれをふりあおぎ、

無知な農民たちの頭は

変わる。

「(そして何かの神によってそうするよう命じられたかのように)

すぐに、

《削除B》

がやがやうわさを広げ始める。」

⑤ 「(すぐにまたドカンと始まる前兆だ)

《削除C》

――どこかの国が

まもなく火蓋を切るだろう。

それゆえこれら無知な人々がさげふ

おおげさに、

そんな馬鹿な恐れを描いている

その心のなかに。

⑥ おお！ B 29！

しかし田舎は広い、
そしてすべての方向に
星は輝かしく光る。

溝の中で蛙がゲロゲロ鳴く。

そして遠く遠く離れて、蛙がゲロゲロと。

竹笛のするどい音。

太鼓の音。

若い者たちは色と刺激に興奮して溺れ死んだ

芸能祭のために練習していた。

⑦ B 29よ。

そして彼ら本国送還の兵士が今もどって

北から南から。

あちらこちらにオブローモフたちが横たわる。

(注 ツルゲーネフの小説のキャラクター――現実に活動する

ための自発性を欠いた働かない知識人の見本)

そして少しばかり「教育」のある者たち

「ヒューマニズム」のうわさ話…

気取りながら

彼らは愛情のことを話し、

あれやこれや

最終的な空虚のことを。

⑧ (おお！

《削除D》

B 29よ――

ゆっくり、ゆうゆうと、

おだやかに

四月の空を飛ぶ

⑨ B 29よ。

そう、ひさしぶりに

あのなじみのすばらしい轟音よ。

それらの飛行機が無知な農民たちを怖がらせる――

――飛行機が地上に落ちること――

――飛行機が火を噴くこと――

あらゆる国のあらゆる人はもう知っている

そのようなことに支払いはしない。

そしてこの演習はもう

立派な方々によってほんのお遊びで

実施されているのでしようよ。)。

公開禁止を推奨する。もつとも不適切な段は括弧でくくられている箇所である。しかしながら、詩全体のトーンは非常に皮肉である。最後の数行の削除では十分ではないと信じる。詩全体はそれらの最終行にむけて組み立てられている。 Y・Y

* 訳注

①～⑨のスタンザ番号は再検閲報告書の原文にはないが、ゲラと対比するため便宜的に付した。《削除A》～《削除D》の表示も同じ。「オプローモフ」については前号掲載の「翻刻【I】」参照。

裁決書1 平林敏彦「欺瞞者の文学」

秘密

民間検閲局 P P B 第I区 新聞出版係

JP/TOK/PPB/d/1186

処置 傍線部削除

理由 不安扇動

雑誌 『コスモス』（出版地東京・十月発行）掲載記事

記事タイトル 平林敏彦「欺瞞者の文学」

概要 執筆者は、知識人が過去の文学作品によって大衆をだましており、人々はこの事実を認識し、文学の革命的傾向を進展させなければならぬと指摘している。

削除箇所

「…その腐敗の極みに到達した現詩壇のメンバーは、非共産世界の内側で彼らの安全を維持できるようにと、意識的にデモクラシーとコミュニズムを対立させることで、明日のプロレタリア革命へとつづく今日の民主的革命の発展を阻止する試みを無言のうちに開始している…」

検閲官 ザーン

* 訳注

削除指定はフクシマによる検閲報告書と同じ箇所。ただし英訳文の大意は同じだが、訳文全体にわたって修正が加えられている。詳しくは前号掲載の「翻刻【I】」参照。

裁決書2 サカイ・トクゾウ「長城」

JP/TOK/PPB/d/1187

15 January 1948

処置 傍線部削除

理由 中国批判

雑誌 『コスモス』（出版地東京・十月発行）掲載記事

記事タイトル サカイ・トクゾウ「長城」

概要 これは日本軍の中国侵略を思い出させる詩であり、今日の共産

軍の休息地としての万里の長城を描写している。

削除箇所

「…長城は怒りで身をふるわせて

吠え続けるだろう

あらゆる専制君主が打ち倒されるその日まで

政権が交代するまで…」

検閲官ザーン

秘密

*訳注 削除指定はフクシマによる検閲報告書と同じ箇所。ただし

英訳文の一部（最終行）に異同がある。

Until the regime alternates. (検閲報告書)

Until the regime changes. (裁決書)

裁決書3 伊藤和「B29の大音」

秘密

民間検閲局 P P B 第I区 新聞出版係

JJP/TOK/PPB/d/1188

15 January 1948

処置 以下に示す

ブランゲ文庫所蔵『コスモス』第七号検閲文書【II】

理由 不安扇動

雑誌 『コスモス』（出版地東京・十月発行）掲載記事

記事タイトル 伊藤和「B29の大音」

概要 これは、現在の日本の上空でおこなわれているB29の演習と関

係づけて敗北した日本の運命を悲しむ、9スタンザからなる風

刺詩である。

削除箇所

「…まさに空の演習である

そして落とされる一機もない…」

(傍線部削除)

《削除A》

「…そして何かによつてそうするよう命じられたかのように

すぐに、

がやがやうわさを広げ始める…」

(傍線部削除)

《削除B》

「…すぐにまた始まる兆しだ。

——どこかの国が

まもなく火蓋を切るだろう。

それゆえこれら無知な人々がさけぶ

おおげさに、

そんな馬鹿な恐れを描いている

その心のなかに…」

(引用全文削除)

《削除C》

「…おお！

《削除D》

B 29よ——

ゆっくり、ゆうゆうと、

おだやかに

四月の空を飛ぶ。

B 29よ。

そう、ひさしぶりに

あのなじみのすばらしい轟音よ。

それらの飛行機が無知な農民たちを怖がらせる——

飛行機が地上に落ちること

飛行機が火を噴くこと

あらゆる国のあらゆる人はもう知っている

そのようなことに支払いはしない。

そしてこの演習はもう

立派な方々によってほんのお遊びで

実施されているのでしようよ……」

(引用全文削除)

検閲官ザーン

秘密

*訳注 《削除A》～《削除D》の表示は便宜的に付した。ヤマモト

が「再検閲報告書2」で推奨した箇所とほぼ同じ箇所が削除

指定されている。英訳文もヤマモトのものとはほぼ同じ。ただ

し、《削除B》は「再検閲報告書2」では「And just as if they

had been ordered to do so by some God」とあるが、この裁

決書では「God」が脱落している。《削除C》の箇所は、ヤマ

モトの報告書に書き込まれたブルークレヨンでも、実際のゲ

二四

ラでも、次行(第6スタンザ1行目「Ah! The B29's!」)まで
削除の指定が及んでいる(つまり、裁決書が、実際のブル
ークレヨンによるゲラへの削除指定と一致していない)。これら
単純な転記ミスとおぼしき異同や、訳文の微修正を鑑みれば、
裁決書は事後の報告書とみなすべきであって、処分の直接の
命令書の類ではない。このことは裁決書の日付が、雑誌刊行
納本後である点からもあきらかである。

なお、二人目の検閲官(フルヤ)は、「再検閲報告書1」で、
ゲラ二枚目下段の二箇所の「B 29よ」を削除すべきと推奨す
る意見を出していた。ヤマモトはその二箇所とも鉛筆で囲っ
ていたものの、実際に削除されたのはそのうち最初の二箇所
のみで、それが第6スタンザ1行目にあたる。《削除D》の異
同については本誌掲載の拙論に述べた。

(以上、参考資料2おわり)

(本学文学部助教)